

## 2012年フィンランド紀行

### はじめに

今、ローカルコモンズの原稿を書いている。先行研究のすぐれた実績がすでにたくさん生み出されてきた中、何を今更、わたしなどの書くことが残されているのか、半分自己嫌悪も味わいながらの、つらい船出であった。筆の力もない自分が、60歳を超えて理解力も構成力もますますか細いものとなっていた。「もう、世間に向けて書くのはこれを最後にしよう」と思いながらキーボードを押してきた。本当にこれが執筆というまとまりでは最後になるだろう。これからはホームページ用などのこじんまりしたエッセーのようなものだけにしよう。そんなことをずっと考えてきた。そう出だしをしたためているうちに、もう何かを描き始めている。

そういう状況なんだけど、締め切りがま近くなった頃に、ちょっと構成を変えることにした。すると気持ちがちょっと変わってきた。というのは、ローカルコモンズに関わるということは、わたしの職業人人生そのものだったのではないかと気づいたのだ。いつしか、胆振の勇払原野に関わって約40年になり、その初めの頃にあの勇払原野のたったひとりの植生調査の最中に、土地の神様のようなものに、ふれた。それ以来、土地にはその途の神様つまり産土（うぶすな）の神がいらっしゃる、ということ、まあ、信じるようになったのである。誰に諭されるわけでも強制されるわけでもなく、極く自然にそうなった。

今、環境コモンズという概念を出して、ローカルコモンズの守り手側にたって風土のケアをしている、このボランティアの根源に産土感覚があるのではないかと、ということだ。つまり、ローカルコモンズにこだわっている自分は、ここに骨をうずめるつもりだが、定住意思、地域環境への献身とは、産土に気づいた自分の風土密着性と関係がありそうだということである。

その反面、その土地のうえでは、土地を作り分譲するまでの経済行為が、フローのようにクルクルと巡る。人もその生業の一環で、出たり入ったりし、仕事の用がなくなれば土地を離れ去っていく。恐らく、土地は道具でしかないのが経済である。ローカルコモンズとして土地を見ようとする人間は、フローの土地の底部にずしりというストックの風土を見、それと付き合う。

人間の幸せとは「土地とつながること」だと思う。北海道ではちょっと大きすぎ、厚真とか苫小牧という行政でもちょっと居心地が悪く、もっとローカルな胆振とか勇払原野というようなまとまりがいい。そんな大きさが人とつながる土地の規模だ。

大分前置きが長くなってしまった。その commons のことを書く前に英国とフィンランドに飛んだのだった。英国は、欧州 commons 紀行の と に分けてヒアリングの内容と一緒に記録としてアップした。フィンランド は、2013 年にでる出版物に、同行の S さんが詳細を述べるので、この紀行では、フィンランドの街とヒアリングの枠組みと画像を中心に綴っておくことにした。

## 9月19日(水) 曇り ロンドン～ヘルシンキ

朝 6 時半に、ウインブルドンのジェイムズホテルの小さなレストランでタクシーを待っていると、インド系のウェイトレスがコーヒーを届けてくれた。もうチェックアウトを済んでいるが、支払いはいいのかと聞くと、OK だという。これはありがたい。英国を離れる直前の小さな出来事だが、旅というのはこんなことが印象に残るものだ。7 時ちょっと前にタクシーが来て 7 時 35 分にヒースロー空港のターミナル 3 についた。料金は約 3,000 円だった。10 時前にゲートに入り、英国を離陸したのは A Y 832 で 10 時 20 分。所要時間は正味約 3 時間、時差は 2 時間ある。

往路でしばし滞在したヘルシンキはバンター空港からタクシーでヘルシンキへ約 30 分、数日滞在するホテル・クルムスには午後 5 時半着。ホテルは S さんが探してくれたもので、ヘルシンキの中央駅の真ん前、隣はスーパーとヘルシンキ大学のサテライトという、とても便利な場所にあった。Wi-fi のパスワードと一緒に、もし接続不良の場合のためにとコードをフロントでもらったが、なるほど、PC はヘルシンキ大学のアクセスポイントを感じていた。幾つかの wi-fi のアクセスポイントが並んだが結局コードを使用した。

このホテルで通訳兼ガイドのうら・ピッコラさんと待ち合わせをしており、午後 5 時 45 分からロビーで明日からの打ち合わせをした。6 時半過ぎ、4 人連れだっただけのホテルのそばのレストランに食事に出た。万人権とトナカイのこと、海外からの犬ぞりのツアーがトナカイ飼育の邪魔をすることなどの最近のニュースをウラさんは紹介してくれる。このほかサーミ族のこと、ウラさんの日本留学のこと、フィンランドの電源のこと、ビールのこと、政治や教育のことなど、問わず語りにフィンランドのあれこれを興味深く聞く。

## 9月20日(木) 快晴 市内でヒアリング

### スオウメン・ラトゥ社でアンネさんに聞く

朝 7 時に朝食、8 時 20 分 4 人連れだっただけで出発。歩いてバス停に向かったのだが、うっかりバスを乗り過ぎて結局タクシーを拾った。フィンランド最初のヒアリング先は、スオウメンラトゥ社。フィンランドのアウトドアスポーツ振興のトップに位置するこの会社には、アンネ・ラウティネンさんという万人権研究者がいらっしやるのである。フィンランドの万人権に関するヒアリングをこういう形で始めることとなった経緯を説明しなくては

けない。わたしたちは、フィンランド訪問にあたって、北大にあるフィンランドセンターを訪ね、その担当のフィンランドの方に、こちら側のミッションを率直に伝えたところ、とても関心を持ってくれて、環境省、ヘルシンキ大学、森林公社、それとスオウメンラトゥ社のアポを取ってくれたのだった。特に万人権についてはアンネさんと森林公社をおとづれるだけで十分だろうといわれる2社をまず冒頭に訪問することになったのである。



8時55分、アンネさんに自己紹介しながらコーヒーをいただいた。冒頭代表して小磯先生が苦東1万ヘクタールの中にフリーアクセスのエリアを感興コモンズと位置づけをして管理と自然享受を同時に進めているというようなプレゼンテーションをした。アンネさんは面白い、とまずおっしゃってから、「素晴らしい活動だ。フットパスがあると盛りに入ることができる。フィンランドでも自然を保護することは大事だが、アクセスできなかったり、コネクションをつくらないと始まらない。それはとても大切だ」と、わたしがたどり着いている結論のようなことを先ずおっしゃった。

「この会社では、万人権を応援している。万人権を使うことが大切だ。どうしてかという人と森の健康を考えていなかった。マチにいるから不健康になる。も p 李と自然はもっと大きな役割を果たす」。それに対して「日本では土地所有権が絶対であるが、フィンランドの万人権は幅広く友好に働くのがとても興味深い、訪問の中心テーマだ」と小磯教授が応じる。

アンネさんの専門は surbay of forest 臨森林学というところか。万人権奨学金の関係でテーマを与えられてスタートした。「万人権はメリットが多く、フィンランド人にとってこれを利用できることはあたりまえ。幼児、誰でもだから個人だけでなくみんな使える。フィンランドは森に行くことを子供のころから教えている。野外といえば森にあそびに行くことをさす。人の健康とか心理、脳にいいから go to nature というのはフィンランドでも最近言い始めた」。Green care という英語も使われ始めているらしい。また、野外の活動はモチベーションに関係する、とみている。湖や森に行くことは国の経済にも関わる。健康はフィンランド人の96%が毎年外で運動すると言っているのもっと課題になる。森の価値観を考えると、木は数でなくどのように利用されているかが問題で、生活に大切だ、などと語った。

詳細は後日出版するレポートで関口さんの項を参照願いたいだが、個人的には、静かなフィンランド人の森林観をかいま見る思いで聴いた。特にメンタルヘルス、幼児教育との関係などについて水を向けると、だいたい想像したとおりの返事が来た。35年ほど前の学生時

代に、フィンランドから助成の留学生が造林学教室に来ていた。ドイツ林学を手本にした北海道だが、当時も理論的なことが一杯語られてもちろんそれが講義になっていたのだが、彼女は「日本人は森林を頭で考える」と異を唱えていたらしいが、これは今、わたしにもわかる。林業では造林技術の確立はあっても流通する林業がない。つまり出口がない。また、森林が持つメンタルな効果については不問だった。森林と肌身で十分付き合う文化は消えかかっていた。留学生はそこを言いたかったのではないか。遅ればせながらここ 20 年ほど、ようやくわたしは「森林を感じる」ようになった。周囲の方々にも「情緒で付き合おう」と勧めている。

アンネさんを通じて聞くフィンランド人の森林観と万人権のことはとても示唆に富んだ。以下、箇条書きに受け答えを記しておこう。

- ・土地の所有者と万人権利用のトラブルは、良識的な行為は全く問題がない。今の万人権に問題があるとアンケートで応えたのは 1% だった。ただ、「焚き火」は問題になる。ベリー摘みはどんなにとっても全量の 10% で、あとは森に残しているので問題ないとされる。課題はトナカイ飼育地域の犬ぞりで、トナカイは犬を恐がる。スノーモービルとバギーも問題を起こしている。
- ・万人権は大きな影響がなければ OK と書いている。レギュレーションがないのがベスト。書けば、万人権は狭くなるからだ。
- ・国有地、私有地などのほか、自然を守るところ、畑、工場、軍隊の土地など、場合別に万人権の行使は違う。季節によっても行使は変わるが、判断は利用者の責任。
- ・アウトドアの利用拡大は経済にもプラス。それを進めるためには「森に行きやすくすること」「入りやすくすること」。フットパス、看板、サインは大切。焚き火の場所の提供も大事なこと。
- ・フィンランド人と森の緊密性の背景で最大は人が少ないこと。年に済む人でも散らばっている。昔から歳に済んでいたのではなく 1970 年代から歳に集まりだした。みんな、ふるさとを知っていて自分の子供を連れて行く。もうひとつ、多くの人々が別荘を持っていること。これが大きい。大きなマチヘルシンキだけ、あとは地方だ。大戦の終わり頃までみんな田舎に住んでいた。
- ・( 関口さんのメモから ) 「近年多くの人たちが歳で生活を送るようになって、ストレス解消や病気の改善などにつながることで認識されるようになり、人間が健康に暮らしていくために、自然の果たす役割や昨日に着目が集まると思う。そのためにも自然に触れることができる仕組みなど、気軽に森や林などの自然にアクセスできる環境が整っていることは非常に重要だ。自然と関わる機械がなければ、自然保護への意識も高まらない。その点で万人権の存在は非常に重要で、万人権を継続的に行使していくことが大切。
- ・幼稚園や小学校の先生は子供と森のつながりが、教育のうえでプラスであることを認識している。また子供の機能的な判断力、例えば滑りやすい土地でも動けること、岩に登る、トモダチを支えるなど。これは森に行かなければわからない。

アンネさんは最後に、北欧では「万人権」を世界遺産に登録しようと考えていて、そうすれば自然を大切にすることになるし、ブランドになる、と構想を教えてくれた。ヒアリングは 11 時に終わった。アンネさんは思いついたように大きなムー民のぬいぐるみをもつて来てくれたので記念撮影をした。

森の入り口のこと、子供をまず森に連れて行くことを静かに強調される方に久々にお会いした。「なかなか、万人権は理解してもらえないが、わかってもらえたようでうれしい」とおっしゃっていたのが印象的だった。



ムーミンはラトウのマスコットキャラクター

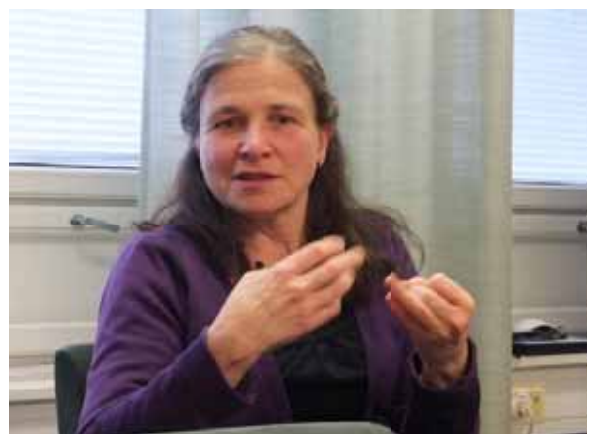
### 森林公社にて

わたしたちは次の訪問に備えバンター駅に戻って、軽いお昼を食べてから 13 時に森林公社メッツアフォリトゥスを訪問した。対応してくれたのはマルティ・アアルニオさんとメルビ・ヘイノネンさん。同行の関口さんのメモによれば、森林公社は「国有地と水域を合わせて 12 万ヘクタール以上を管理し、それらの領域の活用を推進することで、フィンランド社会に最大限の利益をもたらすことを目的に活動している国営企業」「収益の 85% を占めるのが林業経営で、そのほかに森林不動産事業（れんらる宿泊施設の提供）、樹木の萎えや種子の生産や同上資源事業を行う子会社もある」。こうした森林関連のほか、自然保護やハイキングエリアの管理、狩猟や漁業権のライセンス交付、レクリエーション活動の推進など、公的な業務も行っている。



ヒアリング ヘイノネンさん

わたしたちの訪問目的は、小磯先生から NPO を柱に説明。「日本の最北の島、北海道から来た。今回同行した草苺が NPO として 1 万 ha の広大な産業エリアの一部をフットパス、ベリー摘み、森づくりなどをコモンズの考え方で取り組んでいる。森林を多面的には日本でも大事で、わたし小磯は大学の研究者とし



てサポートしている。調査をしているうちにフィンランドでは万人権を先進的に進めていることを知り、それをお聞きするためにやってきた。」

森林公社はフィンランドの森林の 30%を管理している。ビジネスになる森林に取り組み売り上げは国のものとなる。The state owns,we manage.という間柄であるという。万人権はフィンランド人だけでなく外国人にも適用され、フィンランドの 96%の地域で行われている。万人権の重要な役目はアウトドア活動の推進と観光利用だという。特に北フィンランドでは伝統的な職業としてトナカイ飼育があり、これも万人権があって始めて成立する。トナカイ飼育地域、珍しい野鳥のすむエリアで制限があるほか、軍隊が使っている土地と自然保護特別地域は除外される。万人権を行使できないのは畑 7%と建閉地 3%の 10%だけである。

プランニングシステム、戦略プランなどかなり詳しい話も精巧なパワーポイントで伺った。ハビタットマネジメントや復元の具体策も示された。マルティさんは 37 ある国立公園の観光とビジターモニタリングについてプレゼンしてくれた。とても具体的な調査なのでローカルレベルの決定ができることを強調していた。これによってレクリエーション需要をつかみ、新しいサービス提供につなげる計画で、万人権による新しい雇用モデルのひとつとして注目されているという。

なにか森林公社とイメージを越えている。フィンランドに最も賦存する森林や自然を元手に、質の高い調査が戦略的に展開されているという印象である。万人権の良識からはずれる色々な行為も、国立公園では警察のような仕組みを取り入れてマナー喚起と圧力になっているようだった。

## 環境省にて

バンター駅からヘルシンキのダウンタウンに戻る。英国でもそうだったが、ヒアリングの初日に、相手の都合でラッシュになる。この日もこれから 3つめのヒアリングを、フィンランド環境省で行った。あまり余裕のないスケジュールだけでも、ウラさんが土地勘のあるフィンランド女性なので、スルスルと訪問先につながる。その気持ちよさはちょっとした格別さがある。

訪問した環境省の建物は石造りの堅牢なつくりで、わたしたちは天井の高い応接間のようなところにと通された。相手は、環境省で万人権を扱うペッカ・ツーナネンさんとマルクス・テラスティさん。環境省では、アンナさんと森林公社を訪問されたら環境省に来なくても万人権はわかったようなものだ、と冗談



めかしていったようだ。そのためか、前段のペッカさんの部分などはやや復習のような内容もあった。コーヒーと紅茶、菓子パンのようなものが用意されており、くつろいだ雰囲気を用意されてある。

以下、特筆すべきことのみかいつまんでメモしておきたい。

- ・フィンランドの畑と建物をのぞいた 96%は万人権がカバーしている(前述)。万人権について一般的な言い方をすれば、「禁止されていないものはOK」。
- ・法律で決めていないので問題が起こるのではないかと所有者と利用者にアンケート調査をしたら問題があると応えたのはわずか 1%だった。
- ・万人権に関係する 30 の法律がある。環境省だけでなく、省は関係者を調整することが役割。
- ・ガイドラインをもし創れば国が予算を用意しなくてはいけない。予算がないのでそれはしない。
- ・万人権は森のなかでひとりであることであり、一般に使っているわけではない。(この意味は不明であるが、ちょっとキーワードっぽいので付記)
- ・フィンランドには 200 万人の個人の森林所有者がいる。別荘を持っているのは 20 万人、ボートやヨットは 70 万人、人所有の道路は 30 万 km。
- ・万人権はアタリマエのことだったが、この仕組みを利用した環境政策、環境マーケティングはこれから。「生きていける必要」という理由からで、儲けや観光の考え方をあまり持ち込まない。
- ・万人圏の理由で裁判になることがない。ゴミや伐採にしても、それは所有者の責任でエビデンスを出さないといけないから。一方、企業や組合などの団体から、裁判などの争うごとに関する事例や情報をほしいという要望があり、アンネさんとともに「everyman's right and acting in another area」という本を出版した。
- ・世界の紙需要は減っており、紙会社の多かったフィンランドは解雇が続いた。森林所有者にも影響がでた。公益的機能や新たな目標を持つ必要がある。
- ・森林所有者にとって万人権はどのようなプラスマイナスがあるかは表現が難しい。相互に利用するからだ。ただ、別荘の値段は万人圏のベリーと湖があれば高くなる傾向がある。



わたしは北海道についてちょっと説明した。「北海道は 140 年間で、かつて数万人の人口が 560 万に膨れ上がった土地であるが、日本ではもっとも人口密度が低く、フィンランドの万人権のようなものがある。名前はないのだが、寛容なソーシャル・キャピタルのようなものだ。少子化と高齢化で過疎地ということが現実化し、人々は都市に集まる。森林管理に手が回らない。」という現状を話すと「フィンランドも過疎地の問題は同じだ。高齢化

も都市への集中も一緒。戻るのは年寄りばかりで地域に人がいなくなる心配があり、サービスをどうするかが問題になっている」という返事だった。しかしITが普及しているので田舎で通勤しなくてもよいケースもある、と付け足した。解決策のひとつはここでも同じであった。

長いヒアリングの一日は終わった。夜は、小磯先生の関係で日本大使館の方を招待してAINOというフィンランドレストランで会食した。ヘラジカのステーキを食してみたが非常に美味しかった。このレストランがある通りは港へ続くが、札幌の大通りのようなその通りにはマルメッコなど有名店がいくつも並んでいて、滞在中とても重宝した。



**9月21日(金) 曇り 午前；自由 午後北大フィンランドセンター表敬後、ヘルシンキ大学**

### 午前、港の屋台へ



前日が少しハードで、今日は偶然午前中はフリーになっている。朝食後、一応、目抜き通りを歩いて土地勘を養う。ホテルが駅のそばなので、とてもわかりやすい。ホテルの部屋にはWi-Fiが数種類飛んでおり、その中にヘルシンキ大学のものが混じっているのだが、ホテルの近所を見渡すと向こう隣がヘルシンキ大学のサテライトのようなライブラリーだった。というより、このあたり一帯がヘルシン

キ大学のエリアだった。ちなみのホテルの部屋はWi-Fiもケーブルでも可能だったが「もしうまくいかなかったらケーブルで」とフロントが言うようにWi-Fiが不調だった。ケーブルは快調な速さだったがどういうわけかメールの送信が上手くいかないまま数日過ごすことになった。困ったことだ。



苦手の買い物ゾーンを下見して、大きな通りを港へ進んで市場の屋台群を見て回る。ベリーが6,7種ありそれとすもも、キノコは「かもめ食堂」に出てきた kantarelli が置いてあった。2リットルで10ユーロ、1リットルで1ユーロで、フィンランド人によると、滅多に採れないのだという。だから高い感じがする。



屋台はカラフルだ



リンゴンベリー（コケモモ）



カンタレリ。食べてみたい



屋台はサーモンなど魚の美味しいにおいも



フェリーの岸壁



公園に若者が集っていた

### 北大フィンランドセンター表敬

ヘルシンキ大学は午後2時からなので、その前に、このヒアリングのアポイントを採ってくれた北海道大学のヘルシンキオフィスを訪ねた。わたしたちの視察のことは、札幌にある北大のフィンランドセンターからここに来て、ここからヘルシンキ大学などにつながったもの。だから万人権 = 法学部になったのではないかと、というのが小磯教授の推測である。ヘルシンキ大学では、法律関係の先生方の万人権をテーマとしたセミナーが開催されわた

したちは半ばそのゲストとして参加することになっていた。

北大ヘルシンキオフィスを訪ねるト所長さんは外出中で、出専門調査員のKさんが対応してくれ、シナモンロールとコーヒーをご馳走になった。日本の大学院からこちらの大学院に留学しているようだった。このオフィスは2012年4月に準備に入り6月にオープンしたばかり。北大との交換留学のプログラムは1年。かつて北大はオウル大学だけとの交流だったのがヘルシンキ大学とロバにエル大学が追加された。何故ヘルシンキなのかは、北大がヘルシンキ大学と結びつきを強めるという意味ばかりではないようだ。それよりヘルシンキの空港が欧州各地への玄関口になってきたことと関係がある。ヘルシンキは日本からの最短の欧州の空港でありヘルシンキのバンター空港がハブ空港化しているのである。ここから20本以上の空の便がヨーロッパの各地につながっている。往路でもここでトランジットに要した時間はわずか45分で、荷物はもちろんスルー、快適に英国行きに乗り換えることができた。そして何より、バンター空港はヒースロー空港などに比べ極めてシンプルにできているから安心だ。

### ヘルシンキ大学セミナー

午後2時、ヘルシンキ大学にお邪魔する。大きな会議室のようなところに通され、三々五々先生たちが集まってきた。その数10人、ヘルシンキだけでなく地方の先生も加わったセミナーだ。冒頭、中心になった先生が、「ようこそ。8月にフィンランド研究センター(オフィスのことか)からメールをもらい、日本からパブリックライトのことを勉強したいので対応願うとのことだった。この際伝統的習慣とコンセプトについて学ぶセミナーにした。いろいろ議論しよう」と挨拶した。刑事司法が専門のキッコ・ヌオティオ教授で学部長とのことである。



小磯先生は、25年間北海道開発庁という国の機関で地域開発、地域計画に携わってきたことや苫東コモンズとNPOのこと、今は大学でアカデミックな部門からのサポートをしている、とわれわれのことを含めて英語で自己紹介し、伝統に根付いた万人権についてプロの方々からお聞きできるのは大変光栄だと挨拶を結んだ。



早速、パワーポイントを使ったプレゼンが始まった。環境法、法制史、法哲学、憲法、それぞれを専門とする方々が次々に英語で発表が進んでつど若干の質疑が行われた。帰国し

てからメモを見ると、英語のキーワードと日本語がただ乱雑に並んでいて、あまり意味が取れない。英文和訳のメモスピードが話題に付いていけない。大きく言ってしまえば、フィンランドの万人権は基本的に上手く行っており、訴訟したり法制化することをできるだけ避けながら推移させていこうという流れにあることがわかる。制度化は万人権を狭める、という環境省の考え方と重なる。

詳細は、年内に観光される出版物の関口さんのまとめをご覧くださいことにして、ここでは特に記しておきたい教授たちの発言をメモしておくことにする。

### キーワード、キーセンテンスのメモなど

- ・万人権は興味深い権利だ。憲法には書かれていない positive law である。
- ・ property owner と user のもめごとは稀。
- ・万人権は 20 世紀まで法的なコンセプトでなかった。古いシステムで、少人口と thinly populated が起因。大部分の森林は村のコモンズだった。大事なことは継続。( legal history )
- ・基本概念は the free use of urban space
- ・万人権は common right。Unwritten Constitution
- ・万人権は 1443 年のスウェーデンとうちの時代から来ている。万人権といわれるようになったのは 30 ~ 50 年前から。
- ・万人権はスウェーデン時代、ロシア時代を経てフィンランドで成長した。
- ・万人権はフィンランドの憲法のドラフトには入っていたが最終段階で外した。不動産へのフリーアクセスは property right の例外として環境のところから自然享受として入っていた。憲法で今かえるべきは漁業と鉱山。

わたしが訪問前に資料で読み込んでいた限りでは、万人権は法制化されていないものという理解だったので、次のように質問した。「万人権の対象としてベリーやキノコを考えていたが、例えば、散乱のために川を遡上するサーモンなどはどうなるのか。それは別の法律があるのでしょうか」。これに対して環境法のアリ教授が「厳しく禁止されている」と答えてくれた。その後、あらためて万人圏の枠組みを探ると、万人権がどーんと認められているという理解より、数々の法律のすき間にあるフリーアクセスの権利が認められていて、それを万人権と呼ぶ、と理解した方がいいのである。これは環境省発行の Everyman's right in Finland ( public access to the countryside:right and responsibilities ) という冊子を読みながら気づいたことである。

ややリラックスの雰囲気ながらとてもアカデミックな興味深い時間だった。そしておしゃれなゼミである。こういう積み重ねはさすがに最高学府の強みである。最後にキッモ教授と環境法のアリ教授にお礼を述べて二時間あまりで散会した。

夜は 7 時にホテルのロビーで待ち合わせて中華料理を食べに出た。リーズナブルな値段で

美味しかったのだが、帰りに 3 人道に迷って帰還。

## 9月22日(土) 曇り ヌークシオ国立公園へ

### ウラさんのお父さんの森と日常

万人権のヒアリングとあわせて、万人権を享受している市民生活を見ることにしていたのだが、目的地はヘルシンキの西にあるヌークシオ国立公園に絞った。この企画はウラさんからウラさんの両親へと伝わり、お二人がヘルシンキからやってきて同行してくれることになった。朝、朝食をご一緒し、買出しなどして出発したのはお昼だった。電車でエスポまで行きそこからバスである。朝食時やバスの中で、ウラさんの通訳でお聞きした事柄はこんなことだった。



- ・住まいはオウルから 100km ほど南のラッヘ。10月に初雪が振り、11月に本格的な雪。
- ・セントラルヒーティングの熱源は薪とオイル。別荘と自宅で年間 30 立米の薪を使う。(注；約 10 棚強。北海道は一般住宅で 6 ヶ月で 2 棚で足りる) 薪を使うのは、オープン 2、サウナ 1、ファイアプレイス 3。
- ・リンゴンベリー(コケモモ)摘みはリンゴの代わりということではない。ビタミンCのことはあまり考えたことない？
- ・ウラさんを高校のときだすのを心配した。4年前に来道して弘前の桜を見た。日本の桜はフィンランドのオーロラか。
- ・キノコは、イグチ、ハツタケ、カンタレリなど。
- ・70ha を兄が引き継いでそれを買って 7 人で割った。所有山林の面積は 10ha。財産として森林を持つ人もいるが、父は趣味。多いのは、ヨーロッパトウヒ、ヨーロッパアカマツ、シラカバ。
- ・万人権を意識したことはない。万人権で邪魔になったことはない。ヘラジカが造林朴を食害する。
- ・自分の林はパインが多い。広葉樹はシラカバ。カエデはない。シラカバからキシリトールを取れるが、万人権で認められていない。
- ・100年で直径 40~50cm にして輸出する。目が詰まっているので建築用。天然更新もするが次官がかかる。自治体ごとに森林組合がある。補助金はない。
- ・チェーンソーはハスクバーナ、トラクターはマルメット社。デザイン大手のマルメットは



もともとトラクター製造会社。

- ・40km はなれたところに別荘があり薪を運搬する。お母さんは時々自転車で別荘に行く。
- ・猟などにライセンス要る。釣りもハンティングも年間それぞれ 3,000 円。
- ・4 月；海が凍っているときに網で魚取る。庭の準備、7 月；ベリー摘みがスタート（ブルーベリー、クラウドベリー、クランベリー）9 月；リンゴンベリーとキノコ。

### 森を歩く

わたしたちはバスに乗り換えヌークシオ国立公園に向かい、約 30 分ほどで山間のバス停に到着。途中数パーティのボーイスカウトに出会った。彼らは途中のバス停で楽しそうに降りていった。引率者のような人がいないようにも見える。自主的にバスを降りる感じだ。ウラさんに寄ればフィンランドには 6 万 5,000 人のボーイスカウトがいて、アウトドアを上級生が下級生に教える習慣があるという。



林道を 30 分歩いて湖のほとりのビジターセンターに着いた。センターにはムササビの彫り物がおいてあったがムササビはこの講演のマスコットとのこと。ここから湖を巡るコースに入る。森林はいわゆる大木ではない。ヨーロッパトウヒ、ヨーロッパアカマツのほか、しだれるシラカバ「ペンデューラ」、ヤマナラシ、バッコヤナギ、イヌコリヤナギ、ハンノキ、ドロノキなどが見られた。マガモとカルガモのような水鳥のほかに林でクマガラを見た。



山道をアップダウンしながら会長に歩く。途中でベリー摘みをした。コケモモといえば大雪山などでポリタンクに摘んだものだが、実はさほど取れるわけではない。しかしヌークシオでみたコケモモは、絨毯のようである。それにクロウスゴのようなブルーベリーが混じっている。言ってみれば大群落であるから、採りきれないので誰も資源の枯渇を心配しないのは良くわかる。みんなでベリー摘みに興じて、最後はコンペのように収穫を並べてみた。





### 森に迷う

林を歩くときのいつもの癖で、林を感じながら一行の最後尾を歩いているうちに、展望地に気づいた。そこにいたファミリーも「そこにビューポイントがある」と教えてくれた。言われたとおりの崖上の展望だった。道は副道のようにメインの脇を歩いていざれ合流すると踏んで細い道をたどると、これがメインには戻らなかった。これで完全に一行とはぐれてしまうこととなった。メインの道に戻るべく、ルートを探し、ウォーカーにも尋ねた。女性が誰かを探していた、という情報もあって、わたしはウラさんが迎えに来ている可能性があると思い、3差路でメモを書きつつ20分ほど待ってから本道らしいブルーのサインのある道をたどった。湖に近くなって迎えに来てくれた5人と合流した。1時間以上口スして、遅いソーセージの昼食を、アズマヤの薪で焼いて済ました。

ファミリーに混じって子供たちのボーイスカウトのグループがなにやら訓練活動のようなものをしていた。親が子供を森に誘い、子供たちも独自の活動メニューをもって森に触れているのがわかる。夕方、薄暮になった頃に、やっと森にたどり着いたファミリーもいた。かなり深い森づきあいがあることがしのばれた。

### 9月23日(日) 雨 「世界遺産スオメンリンナ」へ

フィンランド最後の日は、この旅行初めての休日で、ヘルシンキの沖合いの島の要塞スオメンリンナに出かけた。港から船で20分ほど。博物館、地下に埋められた砲台の数々。ヘルシンキの町を列強から守るべく、港の入り口で敵戦艦撃墜するのが島の役目である。



フィンランドの建国、独立、そして平和への一筋縄ではない歴史の一面を、スオメンリンナは象徴しているようだ。雨のスオメンリンナで、この国の歴史に初めて触れたような気がした。



9月24日、バンター空港から帰国の途についた。これで英国とフィンランドのコモンズを巡る旅が終った。快適さ、安全、自然享受、そこにある権利と、背景に埋もれている義務と容認、あるいは制度化の闘い。旅行前の事前勉強で知識となった両国の足取りを、この旅で、ほんの少しだけ実感として感じられた。実りの多い2週間だった。

(おわり)